

大腿骨転子部骨折後、 身体拘束された ～身体拘束の軽減と ADL自立度

伊藤徳明 (PT)¹⁾ ,

1) 医療法人らぽーる新潟

在宅にて 認知症患者の一例

向上に対する取り組み～

荻莊則幸 (MD)¹⁾

ゆきよしクリニック

症例紹介

➤ 92歳 女性 要介護2

➤ 家族構成: 長女夫婦, 次女夫婦との二世帯住宅

➤ 診断名: 右大腿骨転子部骨折

➤ 既往歴: パーキンソン病, 慢性硬膜下血腫, 認知症

➤ 現病歴:

<活動性>

H21.12月 自宅にて転倒し, CHS施行

H22. 2月 自宅退院

H22. 3月 訪問リハ開始(週2回)

5月 訪問頻度変更(週1回)

車椅子レベル

歩行は二人介助

歩行器歩行 自立

介入時評価①

- 下肢筋力 : MMT3～4レベル
股関節周囲の筋出力低下を認める
- 立位能力 : 上肢支持なしでの自然立位は可能
ロンベルグ肢位で不安定性あり
- 姿勢反射 : 内乱に対する立ち直り反応は出現
外乱に対する下肢の保護伸展反応はなし
- ADL能力 : Barthel Index 55/100
認知症高齢者の日常生活自立度 Ⅲa
食事以外のADL全般に介助を要す状態

介入時評価②

- 認知能力 : HDS-R 10/30. 短期記憶・物品の認識が低下.
- 心理状態 : 症例⇒病識が低く, 身体拘束に対して抵抗がある
家族⇒活動制限を守れないことに不安がある
介助方法や自立度の判断基準がわからない
- 生活環境 : 夜間も含め, 常時見守り. 歩行は二人介助.
本人のそばから離れる際は下図の身体拘束を実施

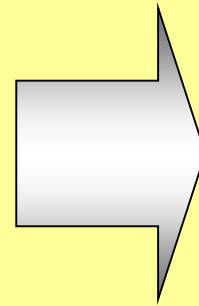


問題点及び取り組み①

<機能的問題点>

立位・歩行の不安定性

- ①股関節周囲の筋力低下
- ②姿勢反射障害
(立ち直り反応, 保護伸展反応)



活動制限

<取り組み>

- ①身体能力の向上
- ②生活動線上での
反復練習

バランス練習や応用歩行練習にて
下肢の保護伸展反応を促す

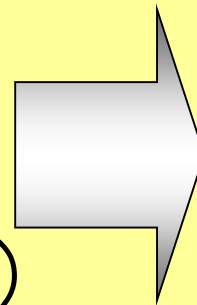
生活動線・環境に応じた行為手順
や運動パターンを獲得する

問題点及び取り組み②

<心理・社会的問題点>

本人の病識低下 及び 家族の過介助

- ①本人が活動制限を守れない
- ②家族の病状理解低下
- ③生活空間の狭小化(障害物等)



身体拘束

<取り組み>

- ①行動評価と段階的な
目標・指標の提示
- ②環境設定

本人が動きだす目的や
時間帯などを把握する

動線上の障害物を整理し、
広い生活空間を作り出す

再評価①(2ヵ月後)

- 下肢筋力 : 大きな変化は認めず, MMT3~4レベル
股関節周囲の筋出力は向上
- 立位能力 : ロンベルグ肢位・マン肢位安定
片脚立位も短時間ながら可能
- 姿勢反射 : 外乱に対する立ち直り・下肢の保護伸展反応出現
保護伸展反応は範囲・反応速度ともに不十分
- ADL能力 : Barthel Index 75/100
認知症高齢者の日常生活自立度 Ⅱa
入浴以外のADL見守り~自立レベル

再評価②(2ヵ月後)

- 認知能力 : HDS-R 22/30. 短期記憶・物品認識向上
- 心理状態 : 症例⇒身体拘束が軽減したことで、ストレスが軽減
家族⇒常時見守る必要が無くなり、介護負担軽減
- 生活環境 : 屋内ADL自立レベル. 歩行は歩行器を使用し自立
歩行器歩行が障害にならない広い生活空間



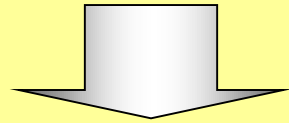
広い生活空間



ベッド周囲の生活空間

考察①

運動には認知機能低下を予防・改善する効果があるとの報告があり、堀田らは歩行により海馬の血流量が増加するとの報告をしている。



本症例でも、認知能力に改善が認められた

<要因>

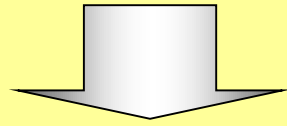
- ① 日常での運動量が増加したこと

┌	<u>身体拘束の軽減</u>
	<u>立位・歩行の安定性向上</u>
- ② 身体拘束の軽減によるストレスの解消
- ③ 術後せん妄であった可能性も示唆

考察②

狭い空間や混雑した空間では、移動空間において十分な適応ができず、動作効率が低下するとの報告がある

また、Schillingsらは、転倒はバランスを崩した時に、どの程度早く立ち直れるか、その反射の速さが重要としている



本症例は環境設定することで、歩行器を用いた移動に適応し、姿勢反射の反応速度も向上が見られた

広い生活空間を設定したことで、視覚的姿勢制御が効率的に作用したと示唆される

まとめ

- 認知症を有しているため、大腿骨転子部骨折後、在宅にて身体拘束された症例を経験した
- 身体拘束の軽減とADL自立度の向上には、身体能力の予後予測と、家族との注意点・危険予測の共有が重要と思われた
- 身体能力においては、転倒しにくい環境設定が重要だが、姿勢反射に対する取り組みも重要であると示唆される
- 認知能力においては、歩行能力も関係しているため、安全に動ける環境を設定し、日々の運動量を維持することが重要であると考えられる